氏　　名　大山泰宏（おおやまやすひろ）
学位(専攻分野)　博　士（教育学）
学位記番号　論教博第 129 号
学位授与の日付　平成19年3月23日
学位授与の要件　学位規則第4条第2項該当
学位論文題目　心理臨床における表象不可能性と主体をめぐる考察
——イメージと語りの否定から——

論文調査委員　（主査）教授 岡田康伸　教授 河合俊雄　教授 伊藤良子

論文内容の要旨

本論文は7章より成り，語りやイメージとして表現できない何かが，心理臨床の過程および「私」という主体の成立に，どのような意義を持つかに関する考察である。

第1章は「表象から表象不可能性へ」と題されている。ここでは，表象不可能性を表象可能にしていくことが，心理臨床の技巧と考えられていることを指摘した。これは，フロイトが催眠や動物磁気といった「表象不可能性の直接性」に依拠する技法や概念から決別し，意識に表れてくるものに限って心の探求を行おうとしたことを意味している。フロイトの仕事は，無意識という人間の心の闇をあきらかにしたというより，それまで表象不可能とされていたものを表象可能性の領野に引き入れることにより，無意識という作業領域を成立したものだとも言える。心理臨床の本質的な仕事のためには，セラピストとクライエントとが表象不可能性という事態に逗留しながら歩むことが必要であり，そのためには新たな心理臨床の理論と倫理が模索される必要があることを主張した。

第2章は「主体の主体化と表象の図像化」と題されている。ここでは，精神分析の理論が抱えているパラドクスについて，思想史的文脈から探求された。精神分析のモデルでは人間の内奥＝心の層の下＝人間の過去＝人間の根源といった，起源の学（考古学）と同じレトリックを使用している点を，考古学研究者のJ.トーマスの論を参考にしつつ明らかにした。精神分析は，近代的主体への懐疑として，能動的で自律的な人間主体への懐疑，意識の差異の体系の外部性に視座を置くといった発想から生じたはずであるが，その意図を裏切ってしまっていることが示された。

第3章は「臨床心理学の言説の系譜」と題されている。ここでは，米国において精神分析は，心理学に受け入れられたが，その歴史的・思想的な背景として，フロンティアの消滅，霊性主義，個人差と発達等の関心があったことを指摘し，またそれがゆえに精神分析が，フロイトの意図に反して，適応を重視したり，個人開発のための技法として変質し，心理学化されていく様子を明らかにした。イメージや語りを心の中に存在するものとして実体化した言説が主流となり，表象が経験的な平面に引き入れられ，それらが本来持つ構想力としての超越論的機能が失われていることが，カントの構想力概念と対比しつつ述べられている。

第4章は「心理査定としての描画法の検討」と題されている。ここでは，心理臨床におけるイメージの扱われ方を検討するために，日本における描画による査定に関する理論や研究を中心にレビューされた。描画による査定法は査定としての客観的な役割と表現療法としての治療的役割との2つの役割を持つ。描画法による査定には心理臨床における治療理論と査定理論のパラドクスがもっとも集約されて表れる。「実存論的解釈」は，描画に描かれたものを解釈する「象徴論的解釈」，外部観察者が設定した諸指標によって解釈する「指標化による解釈」，直感的な印象から解釈する「直感的解釈」とのいずれとも異なり，描き手が画布の上にどのように世界を構築しょうとしている努力を感情移入によって了解しょうとするものである。すなわち，解釈者の主体に描画を通して立ち現れてくるもの，描画に表現されたもの，表現されなかった「地平」としての見えないもの，の相互交錯的な対話（弁証法）の過程を通して，描画者の精神に接近しょうとするものであることが示されている。

第5章は「心理臨床における語り」と題されている。ここでは，語りに関する心理臨床における議論を批判的に検討したうえで，クライエントが語るという行為に着目するこで，「語られたもの」を中心にした従来の理論を乗り越える可能性が探られた。心理臨床では語り手と行為者が同じであること，遡及的な記述ではなく未済の進行中の事象の記述であることが示されている。さらに，語る行為への着目により，発話行為と発話内容の分裂—統合という弁証法的な過程，すなわち，「語る主体」と「語られる主体」の二重性の途絶えることなき生成と否定にこそ「私」という主体が存立することを，言語学者の Benveniste, E. が明らかにした知見を参考にしつつ論証された。

第6章は「語りにおけるセラピストの役割」と題されている。ここでは，セラピストの関わり方，すなわち心理臨床場面におけるセラピストの態度や倫理について論じられた。心理臨床場面においてセラピストが，発話の向こう先の「あなた」として存立し続けるかが，クライエントの「わたし」の生成のために重要であることを示した。この「あなた」とは想像的な内容でみたされるものでもなければ，経験的な次元で語られるものでもなく，超越論的な位相を保ち続けることが，語りかけられる他者として機能し続けることになり，それが重要であると説かれた。この機能を維持してこそ，クライエントの「わたし」がクライエントのすべてを包摂する空虚性を保ち続けることができることが示された。この意味で，臨床的二人称における「あなた」と「わたし」は表象不可能性を保つ必要があると主張された。

第7章は「心理臨床における表象と主体の再構築」と題されている。ここでは，主体が超越論的な位相とのつながりを保つときに，反復して回帰してくる排除されるものを「祀る」という位相の可能性が示された。祀るとは，それを排除してしまうのでもなく，象徴体系に回収してしまうのでもなく，主体が絶対的な外部性と接触を持ち続ける機能であること，そしてそれがゆえに，主体に可能性を開いてくるものである。また，そのために不可欠な心理臨床におけるセラピストの態度（倫理）として，表象されたものではなく表象されたものの向こう側を指し示し，かつ，その向こう側は本質的に出会いが不可能な不在であるからこそ，逆に，セラピストとクライエントとのあいだで，表象の超越論的な機能が生き始め，主体が回復するということを，心理臨床の事例を挙げ明らかにした。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は，今日，心理臨床が陥っている事態を打破するための，新しい理論の構築を試みたものである。心理臨床においては，表象できないものを表象していくことに，治療の理論や技法を基礎づけてきたが，このことによって，近代的な主体観や世界観を乗り越えようとしつつも，近代を支える図式に依拠してしまっており，そのことが心理臨床における理論や技法を制限してしまっているとの観点から，本論文ではそれを打ち破ろうと試みられたものである。すなわち，フロイトが本来目指した表象不可能なものと主体との関係を取り戻すために，表象不可能性の主体における位置づけを探り，心理臨床の理論や基礎付けの再構築は，広大な理論構築の一里塚であり，この着眼点が高く評価された。

表象不可能性の例として挙げられている夢についてまず検討された。夢として現れているから表象されたものではあるが，取り上げられた2つの夢で示されているのはその夢の背後に何かあることを示すものであり，表象不可能性を伺わせるものになると著者は主張する。これはこれなりに認めるにしても，夢を見ても，どのような夢であるかを表現することもできないものがある。これらは表象不可能なのだが，この点については触れられていないのは残念であると検討された。筆者がおもうにここに身体との関係が出てくるのではないか。

精神分析の言説を分析し，歴史的変遷を述べ，近代のゆきづまりから精神分析が始まったにもかかわらず，自然科学的なものとの関係や啓蒙主義との関係などにより，イメージや語りを心の中に存在するものとして実体化した考えが主流となり，表象が経験的なものに引き入れられているなど心理臨床が陥っている欠点について言及し，回復させる必要を考察したことなどが評価された。

また，描画法における客観性を求められる査定としての役割と関係性の中で布置される新たな場に新たなものが生まれることが期待される治療的な役割との二面性から，実存論的解釈の必要性を主張したことが評価された。

現れたものと隠れたものに関して，クライエントが語るという行為に着目することで，「語られたもの」（現れたもの）を中心にしてきた従来のやり方を乗り越えようとしたことが評価された。また，「私」として語る発話行為が「あなたへ向かって呼びかける」ことで私の中心が生成されるから，セラピストが発話の向こう先の「あなた」として存立し続けることが，

クライエントの「わたし」の生成のために重要であることを示したことが評価された。

表象不可能性はラカンが言う「出会いそこない」と関係するのではないかと検討された。出会い損ないとして出会うものが表象不可能性と出会うことであろうかと論議された。

能動性と主体性の違いは何かと問われた。主体性は能動性だけではなく，対象へ働き続けるものであろうし，動き続けるものであると考えていると著者は主張した。能動性にはフロイトの言う欲動に突き動かされる面のあることの検討の必要性が指摘された。

表象不可能性といいながら象徴不可能性と区別し切れていないところもあったのは惜しまれる。しかし，だからと言って，この論文の価値をさげるものではないと指摘された。

事例の取り扱いについて検討された。本論文では１事例のみでの論証であった。多数の事例によるか，１事例を丹念にみていくかのどちらかであろうが，どちらがよいかはなかなか難しい問題である。ひとつの事例によるときは考えを論証したいことを示すとともに，その考えに合わないことが必ずでてくるが，このずれが出てくることをどう考えるかによってさらに発展していくのではないかなどと検討された。

表象不可能性の関わり方のひとつとして，「祀る」と言う概念を持ってきたのは興味深い。しかし，もうひとつこなれていないのは惜しまれると指摘された。

心理臨床を隣接領域から浮かび上がらせ，その問題点を明らかにし，解決しょうと試みたこと，米国の心理臨床の発展史的な視点をもち，日本の心理臨床の発展に刺激を与えるであろうことなどは本論文の特徴であり，高く評価された。

よって，本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また，平成19年２月22日，論文内容とそれに関連した試問を行った結果，合格と認めた。